

北海道における冬期集住・夏期滞在モデル調査

【調査概要】

北海道内の農村地帯の多くは、植民区画の配分によって形成された散居形態の「ムラ」によって構成されていますが、広域分散の居住形態は、町営バスや町道除雪等の地域内交通の確保をはじめとして、各種行政コストにおける負担となっています。また今後、高齢化の進展に伴い、特に除雪などの積雪寒冷期の労力負担などを要因とした都市部への住民流出が予想され、地域の地縁的コミュニティの崩壊と集落機能の低下が進み、更なる人口流出へと繋がるという悪循環の加速が懸念されています。

一方、都市住民からは、定年後の夏期間に、農村部において農作業体験をしたいという需要も見込まれるなど、都市と農山漁村のデュアルライフが注目を集めています。

これらの状況を踏まえ、本調査は、農村における人口減少・高齢化等の課題や都市と農村の連携を見据えた新たなコミュニティのあり方等について総合的な検討を行い、農村住民の冬期集住と都市住民の夏期季節移住という、北海道における都市と農村の連携による新たな居住形態とコミュニティの形成について、構想策定から具体的実践までの経過について実態調査を行い、その展開方策についての検討・提案を行うものです。

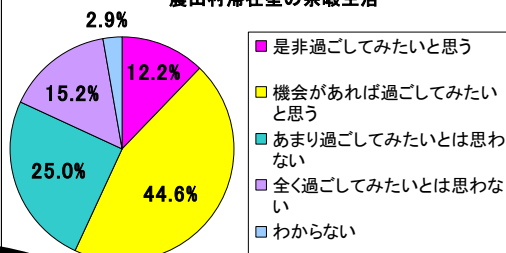
北海道の散居村の課題



コミュニティの弱体化で除雪ボランティアの維持も困難に

都市住民の農村への意識

農山村滞在型の余暇生活



自治体と連携した実践的調査



冬



農村住民の冬期集住
夏は農作業 冬は集合住宅へ

会館等の活用



夏



都市住民の夏期滞在
二地域居住の実現

新たな居住形態の形成

人口減少・高齢化地域の活力維持・発展